

第10回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

企画2

オペラ《アルチーナ》

演奏会批評 (岸純信氏)

『グランド・オペラ』2013年春号 pp. 155-156

※ヘンデル・

フェスティバル・ジャパン

ヘンデル

《アルチーナ》演奏会形式

※ ※ ※

アルチーナ：野々下由香里／ルツジェーロ：波多野陸美／モルガーナ：高橋薫子／ブラダマンテ：山下牧子／オロンテ：辻裕久／メリッソ：牧野正人／オベルト：広瀬奈緒／指揮：三澤壽喜 & 管弦楽：キャンパズ・コンサート室内合唱団 & 管弦楽団

ま

ずはノーカット全曲演奏の快挙に賛辞を。三澤壽喜の

指揮は穏当で緩急の序も明快。ただ、幕切れを爪弾きで終えた点のみ、当時の即興法に合わせたものかもしれないが、様式観と衝突し



ヘンデル・フェスティバル・ジャパン《アルチーナ》
中央は題名役の野々下由香里、右はオロンテを歌う辻裕久
写真提供：ヘンデル・フェスティバル・ジャパン ©青柳 聡

かねないロマンチックな響きが気になった次第。曲を愛し過ぎる余りなのか。しかしオーケストラは全編で大熱演。チェロの清々しさ、ヴィオローネの鮮烈でも調和を乱さない個性、ホルンの活気、流麗なチェンバロ、リユートの優雅な美感などいずれも秀逸と思う。歌手陣もみな健闘。野々下由香里(アルチーナ)は当初、中音域の淡さが魔性よりも処女性を感じさせたが、第2幕終盤のアリア(蒼ざめた霊たち)で怒りのパッセーを歌ってからは勢いが激変。堅実なテクニクのもと劇的な歌声を披露した。波多野陸美(ルツジェーロ)も秀逸。名曲(緑の牧場)では音域が喉に良く合い抒情性たっぷりの名唱。第3幕の(ヒルカ

ニア)の猛烈なコロラトゥーラも見事と思う。高橋薫子(モルガーナ)も凛々と響く声音が頼もしく、アリア(もう一度私をじっと見詰めて)など磐石そのもの。ヴァリアンテではスリリングさをさらに増して文句なしと思われた。

また、辻裕久(オロンテ)もメリスマで声の端正な美感を発揮。山下牧子(ブラダマンテ)も掘りの深い美声でアリアを熱演し、朗唱でのドラマ性も耳を奪うもの。ヴェテラン牧野正人(メリッソ)の堂々たる存在感、少年オベルト役の広瀬奈緒の涼やかな喉の技にも感嘆した。

(2013年1月14日)

浜離宮朝日ホール

岸純信